

第7篇 資本の蓄積過程 第24章 いわゆる本源的蓄積

第4節 資本制的借地農業者の創世記

- ここでの問題は「資本家は本源的にはどこから来たか」ということ。というのも、農村民の収奪は、直接にはただ大土地所有者を創造するにとどまるから。
- 借地農業者の諸形態
 - ・ ベイリフ…領主の土地の差配人=荘宰。それ自身が農奴。
↓代位(14C 後半)
 - ・ 借地農業者…ランドロードから種子や家畜や農具を供給される。農民の状態とあまり違わない。より多くの賃労働を搾取するだけ。
↓変化(?)
 - ・ 半借地農業者…分益農。農耕資本の一部を提供。契約で定められた比率でランドロードと総生産物を分け合う。
↓急速に消滅
 - ・ 本来的借地農業者…自分自身の資本を賃労働者の使用によって増殖。剰余生産物の一部分を貨幣または現物でランドロードに地代として支払う。
- 本来的(?)借地農業者の富裕化
 - ・ 15C 中…借地農業者の境遇やその生産場面は依然として、独立の農民や賃労働のかたわら同時に自作もする農僕と同じように平凡なものであった。
 - ・ 15C 最後の三分の一期～16C 最後の二、三十年を除いた全体…農業革命。共同牧場などの横奪→家畜数の激増→豊富な肥料。農村民を貧困化したのと同じ速さで借地農業者を富裕化。(S. 771)
 - ・ 16C…貨幣の価値の継続的減少→労賃の低下、全農業生産物の継続的な価格騰貴→貨幣資本膨張、しかし、地代は古い貨幣価値で支払う。自分の賃労働者と自分のランドロードとを犠牲として自らを富裕にした。
 - ・ 16C 末…富裕な「資本制的借地農業者」なる一階級

第5節 工業への農業革命の反作用。産業資本のための内地市場の作出

- 独立・自営の農村民の希薄化に照応するもの
 - ① 工業的プロレタリアートの濃密化

(236) ケアリに對する評價。

② 同等量またはより多量の土地からの生産物←a. 耕作方法の改良、協業の増大、生産手段の集積、b. 農村賃労働者の労働強化、c. 彼等が自分自身のために労働する生産場面がますます縮小←土地所有諸関係における革命

● 農村民の一部分の遊離

→①食糧の遊離(可変資本の質的要素)・工業の農業的原料の遊離(不変資本の一つの要素)
=産業資本に資する。

②市場を創造する。つまり、大借地農業者が生活手段および原料をマニファクチュアに販売、マニファクチュアが加工品を農村地方に販売。→農村的副業の破壊、マニファクチュアと農業との分離→一国の内地市場に広さと鞏固さを与える=資本制的生産様式にとって必要。

● とはいえ本来的マニファクチュア時代は、極めて断片的に国民的生産を征服するにとどまり、都市工業と家内的・農村的副業とを広い背景とする。(←原料の加工のために一定の程度まで必要とされるから。) →土地耕作を副業とし、生産物(中間生産物?)をマニファクチュアへ売るための工業的労働を本業とするような、小農村民階級の発生。(S. 776)

● 大工業が初めて、機械をもって資本制的農業の不変的基礎を提供し、農村民の大多数を根本的に収奪し、農耕と家内的・農村的工業との分離を完成するのであって、この家内的・農村的工業の根柢—紡績業と機織業—を大工業はむしり取るのである。だからまた大工業は、初めて、産業資本のために全内地市場を征服する。

マルクス『自由競争論』第1巻第2章
471) 例: 471)の内部。

疑問点など

・S. 771: 「農業革命」という言葉の使い方。

・S. 774~775: 「たとえば、…」以降で、ドイツとフランスとに言及する理由。マルクスは、小生産者による分散的、個人的な生産をどう評価していたのか。

・第4、5節は、理論的に、これまでどのような論点があったのか。